

研究テーマ 平成の教育をふりかえる

研究者 教科教育部 主任指導主事 登内 淳
専門主事 小町谷 聖 小口 博子
奥原 靖彦 柳澤 大介

1 どんな背景から、どんな願いを持ってこのテーマを設定したのか

- ・もうすぐ平成時代も幕を閉じる。その30年間の長い期間に教育の世界ではどのようなことが起こり、どう変わっていったのか、4回の改訂があった学習指導要領を紐解きながら調べ、まとめ直すことを通して、平成の教育の不易と流行を考え、次の時代にどう生かしていくか考える機会を持つ。
- ・これからの知識基盤社会の中で、新学習指導要領の趣旨を生かした教育を行っていくのにあたって、教員間の対話は大切である。子どもたちの姿や、昨今のトピック等を形式にこだわらずに対話することによって、協働的に新たな発見をしていくことができる。そのような教員間の対話を促す研修の一つとして、「平成の教育をふりかえる」ワークショップ型の研修を考えた。

2 テーマの願いに向け、どんなことを調べたり、考えたりしたのか。

(1) 調べ、まとめた(資料を作成した)こと

① 平成の教育史(年表)

平成時代の全国及び長野県で起こった教育に関する出来事を主にまとめた。平成は教育においてどんな変化があった時代だったのかを、年表を追いながらふりかえられるようにした。当初は、多くの事項を盛りだくさんに並べたものであったが、吟味し、テーマに寄せて調べられるようにした。

② 長野県の学校数、児童・生徒数の推移に関わるデータ

平成30年間での長野県の児童・生徒数の移り変わりについて調べ、協議会当日はそこから気付いたことを出し合い、年表とも関わり合わせてその変化の意味を読み取った。

③ 学習指導要領から読み解く(時数の変化、生活科や総合的な学習等から)

平成30年間は、平成元年改訂、平成10、11年改訂、平成20、21年改訂そして、平成29、30年改訂と4回の学習指導要領の改訂があった。学習指導要領の改訂に伴って変わった「授業時数」はそれぞれの10年の時代を写す鏡と捉え、時数の推移から、どんなことがわかるのかを発表した。時に、平成元年改訂からスタートした生活科、10、11年改訂から始まった総合的な学習の時間についても検証した。

<当日の研究協議会の様子>



調べたことを発表する



発表に関わってグループでの意見交換

(2) 協議「平成の教育をふりかえる」

(1) ①～③から読み取ったこと、話し合ったことや、今までの自身の体験や考えていること等から、グループで平成時代をふりかえり、そこから「これからの時代に大切にしたいこと」「そのために今からできること」を話し合った。

協議1 平成は、教育にとってどんな時代だったのか～平成の「不易」と「流行」からふりかえる～

- ① 一人一人、本日のこれまでのグループディスカッションや、発表をもとに、平成時代の教育において「変わらなかったこと（不易）」と「変わっていったこと（流行）」を考え、「変わらなかったこと」は青の付箋に、「変わっていったこと」はピンクの付箋にそれぞれマジックに簡潔に記入する。
- ② グループで、1人ずつ紹介しながら模造紙に貼っていく。同じもの、似たものは近くに貼っていく。
- ③ グループで「平成は教育にとってどんな時代だったのか」話し合いまとめる。



協議2 これからの時代に大切にしていきたいこと、そのために今からできること

- ② ワーク1等をもとに、「これからの時代に大切にしていきたいこと」を考え、緑色の付箋に、「そのために今からできること」を黄色の付箋に簡潔に書く。
- ③ グループで、1人ずつ紹介しながら模造紙に貼っていく。同じもの、似たものは近くに貼っていく。
- ③ 同じもの、似たものを○で囲む。
- ④ それぞれのテーマについてまとめて一文で表現する。



(3) 全体会におけるプレゼン

分科会を行っていくうちに見えてきた「子どもを主語にした教育」をキーワードに、一人ひとり作成したプレゼンテーションを再構成して、15分の発表を午後の全体会で行っ

た。

3 研究して、どうだったのか

(1) 文献調査等から

- ・「学習指導要領の変遷」からの立場から見ていくと、平成元年の新学力観「自ら学ぶ意欲と主体的に社会の変化に対応できる能力」から、「教師主導から子ども主体の教育」への切り替わりが図られ、平成30年にはそれが具現化されてきた、といえる。
- ・児童・生徒数は減少しているが、平成14年からの「信州こまやかプラン」等で、子どもを支えながら、30人規模学級を維持してきたことがうかがえる。
- ・高等学校においては、第1期高校再編計画は、平成21年に策定されてから、平成28年度、再編統合して設置された大町岳陽高校の開校と、白馬高校への国際観光科の設置をもって、再編整備が終了した。中学校卒業予定者数の減少もさることながら、多様な学びを保障する視点からの改革が進められた。第2期は、第1期よりもさらに踏み込んで、多様な学びを可能にする教育環境の整備をすすめ、生徒一人ひとりの自己実現はもちろんのこと、学びの質を変える「高校改革」を目指した高校改革が、現在進められている。
- ・生活科・総合的な学習の時間が始まる前から行われてきた長野県の「総合学習」等で、子ども主体の教育を目指しており、その伝統が、今回の学習指導要領につながっている。
- ・平成の長野県教育の根底には「子どもを主語にした教育」が流れている。

(2) 協議「平成の教育をふりかえる」より

A グループの話し合い

平成の教育の「不易」			平成の教育の「流行」		
知識重視	学校教育目標（知・徳・体）	人間力育成	教科教育の質	学力（評価）の捉え方	活動重視
学校行事	授業型能	個性を生かす	情報化	ICT	共有化（小中高大接続）
子ども中心の教育	給食センター	教育制度（6・3・3・4）	社会の変化→家庭環境の変化、多様な子ども	〇〇教育	若手教員
教師の意識	個の教師の努力		評価（教員評価）		



平成は、教育にとってどんな時代だったのか？

社会の変化が早過ぎた



これからの時代に大切にしたいこと							
教師の協働 職員研修の 質	連携	教師 の専 門性	専門性 (教師の 本質)	学校種間でお 互いにやって きたことを“ 知る”	自分の意 見を持つ	自分の言 葉で語る	他人理解 個人尊重



教師の意識・学び方を変える



そのために今からできること		
批判的思考	教師も学ぶ	視野を広げる

B グループの話し合い

平成の教育の「不易」			平成の教育の「流行」		
変えてから 考えだす	国家戦略 がない	変えること が目的	新しい授業形 態・教科	児童・生徒 のサポー ト・支援	求められる 学びの形
小さくまと めておくと りあえず	教員の社 会性		ゆとり ↓ 学力重視	トップダウ ンが利かな くなった	国際化の形
生徒指導の 大変さ	登校下校	公としての 学校教育	時間の使いま わし方	忙しさ・余 裕のなさ	不登校の増
			保護者の要求	発達障がい の増加	自己肯定感 の減少
			いじめの深刻 化	海外への興 味の減	許容範囲の 拡大
			みんな ↓ ひとりひとり		



平成は、教育にとってどんな時代だったのか？
個別対応，国際化，多様化



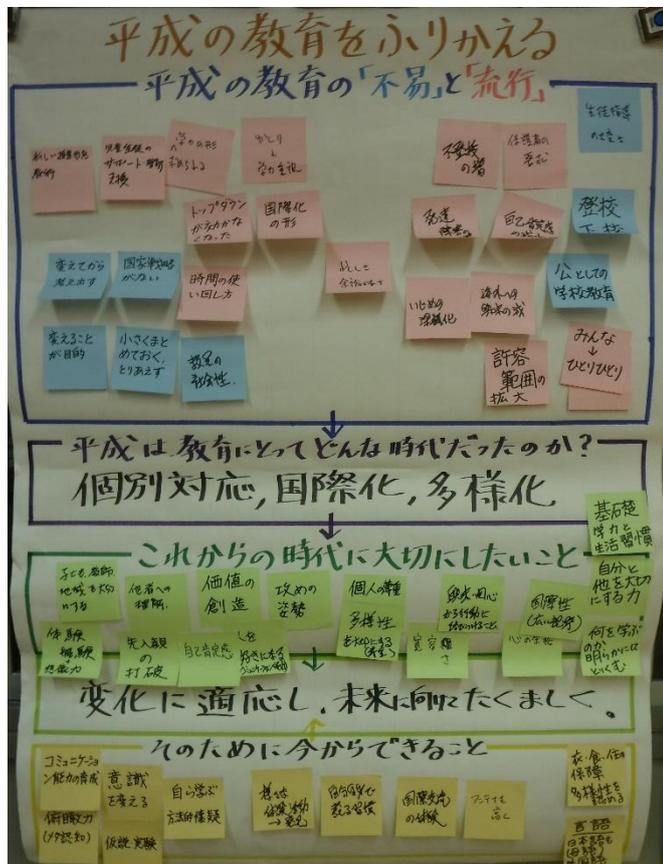
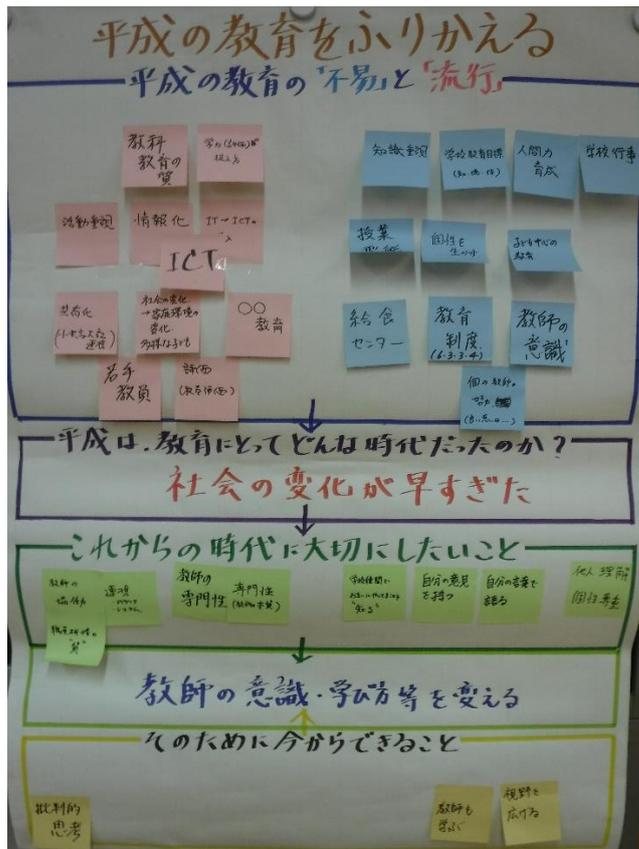
これからの時代に大切にしたいこと					
子ども・教師・地域を大切にす	他者への理解	価値の創造	攻めの姿勢	個人の尊重	興味・関心から行動に結び付けること
国際性（広い視野）	基礎学力と生活習慣	自分と他を大切にす力	体験・経験 ↓ 想像力	先入観の打破	自己肯定感
人を好きになる	多様性を大切にす	寛容さ	心の余裕	何を学ぶのか明らかに取り組む	



変化に適応し，未来に向けてたくましく



コミュニケーション能力の育成	意識を変える	自ら学ぶ方法的懷疑	様々な体験活動→発見	自分自身で考える習慣	国際交流の体験
アンテナを高く	衣・食・住の保障 多様性を認める	言語 日本語（母語） 外国語			



(3) 反省と今後の課題

- 協議では、参加して下さった先生方の対話が多くあり、平成の教育をいろいろな角度からふりかえることができる協議会になった。
- 平成の教育の中で、長野県では『子どもを主語にした教育』が根底にあったことをこちらで言い切ってしまうのではなく、プレゼンでの発表を通して考えていただくことはよくできたと思う。午後のプレゼンで、そのことをストレートに伝えられたこともよかった。
- 新しい時代のために平成をふりかえることは、研究協議会においてはタイムリーな企画であったという声を多くいただいた。プレゼン等、別の機会でも使えるとよいと思う。